

全国ネットワークを構築 稀少道具類の安定確保体制を整える 【西陣織工業組合】



竹箴を用いたつづれ機

千有余年の歴史を持つ「西陣織」。朝廷と都人の盛衰とともにその次代を生き、高度な技術と意匠を蓄え、これを生かした織物を織り続け、日本最大・最高峰の織物と言われるまでに発展した。

しかし、昭和50年代後半以降、わが国の生活様式は欧米化指向に拍車が掛かり衣の態様は一変。和装需要は減退し、加えて今日、高齢化・後継者難と二重・三重の足枷を背負うこととなった。

そんな中、西陣織の特徴である分業体制を支えてきた関連工業を含め、西陣織を製織する上で必要不可欠な道具類に不足を来す事態を迎えた。すなわち、和装需要の減退にともなう織機の減少である。織機が減少するという事は、取りも直さず織機本体およびその部品、ならびに道具類の減少に直結するわけだ。すると、それまでうまくいっていた需給バランスに歪みが生じ、生産に支障が生じたり価格高騰を招き、揚げ句に、これらメーカー、また職人達が開店休業状態から廃業にまで追い込まれるという最悪の事態に至る結果になったのだ。

そこで西陣織工業組合は、これへの対応策として伝統的工艺品を製作する京都の産地組合15団体を結集させ、また、近畿経済産業局、京都府・市をオブザーバーに迎え、『京都伝統産業道具類協議会』を設立。稀少道具類の確保に向けた事業の推進を図るとともに、わが国初の道具類の全国的なネットワーク化を構築し、その安定確保に寄与することとした。会長には渡邊隆夫西陣織工業組合理事長が就任した。

本年度は、全国の染織関係者に最も危機感が募る〈竹箴・たけおさ〉(箴とは、織機にかかっている経(たて)糸が絡まないようにするとともに、経糸

の間に通した緯(よこ)糸を織り込む道具。その竹製。)を取り上げ、先ごろには〈竹箴〉に関するアンケート調査票を作成し、北は東北の鶴岡・小千谷産地から、南は九州の久留米・沖縄の琉球産地までの、全国40産地組合に配布したところである。

この調査は今後、各産地への聞き取り調査などと併せて取り纏め、次年度には受発注システムを確立し、稀少道具類の安定確保体制を整えることにしている。とはいえ、どれくらいの産地がこの主旨に賛同し、参加していただけるのか。ロットの問題、価格問題、製作期間等々、ハードルは高いが適正価格と即時対応可能な受発注システムを構築することにしてはいる。今ならまだ間に合い、可能である。〈竹箴〉の生産工程は30~40工程あると言われているが、中でも一番難しい、技術と経験を要すると言われる〈箴羽・おさ〉を作る職人さんを、ここ1~2年で2~3人育成したところでもある。

さらに、以降は〈竹箴〉で確立した受発注システムを手本に、既述以外にも、例えば、手織機・力織機の部品等々を順次取り上げ、調査・研究・受発注システムの確立を目指す。同時にこれら職人の養成もおこない、わが国の、そして、西陣が誇る染織文化を継承していきたいと考えている。



稀少道具となった竹箴

〇問い合わせ先

西陣織工業組合専務理事 碓山 俊光

(京都伝統産業道具類協議会事務局長)

住 所：京都市上京区堀川通今出川南入

電 話：075-432-6131

(今回は12月19日付に掲載予定です。)